

「そんな商賣があるかゝるな、お客さんに不味物を出せんで、前に味を見てそれからお客に出すのや、其の上で氣に入つたら御祝儀が貰へるねん」

「え、商賣やな、物を喰ふて御祝儀が貰へるなら私も板場になるか」

「板場になるて、お前庖丁が持てるか」

「何丁程や」

「一丁持つたらえゝのんや」

「庖丁の一丁位なんでもない、此の間鉞を擔げた」

「金時やが、一丁の庖丁を持つて鮮かに料理が出来るか」

「そら出来んハ」

「そんなら板場になつて何をするねん」

「汗を吸ふて物喰ふて、御祝儀を貰ひに」

「そんなボロイ事があるかゝるな」

「あの眞ん中に眼鏡を掛けて座つてる人は何んや」

「あれが此の中の客や」

「あれ脚絆か」

「脚絆やない、客とはお客や」

「お客ならお客と云ふたらえゝのに、客や云ふよつてに解れへんね」

「そこを洒落てお客を客と云ふたんや」

「洒落と云ふ物はよう變る物やな、藝妓を洒落て藝州と云ふのなら、お客を洒落てキヤ州と云ひな、お客を客なら、藝妓をゲイ、舞妓がマア、仲居がナア、板場がイ、お前がアで、此の人がホカ」

「コレ、阿呆を割て云ひないな」

「あの客甚い豪さうな顔を仕てよるなア」

「豪さうにする苦や、何程かゝつても彼の人が出すねん」

「何程かゝるやろ」

「まあどを安う見積つても此の位やな（指五本出す）」

「エ、五錢か」

「阿呆、もつと上や」

「五萬圓か」

「そないに間が飛ぶかい、五十圓や」

「五十圓か、何日で」

「今夜一ト晩や」

「一ト晩に五十圓も遣ひよるのか、手荒い事を仕よるねなア……併しあの客は片輪やな」

「何處が片輪やねん」

「右の手があれへんが」

「ナニ右の手が……コレ、あんじよう見んかゝるな、右側の藝妓の懷中へ手が這入つてるねん」

「サア何んや錢遣ひが荒いと思ふたら、そんな事を仕てよるねんな、オーイ藝妓、氣を付けや懷中へ手が這入つてるで、紙入れや錢入れを取られん様に氣を付けや」

「コレ、何を云ふてるねん」

「お前、藝妓の懷中へ手が這入つてると云ふよつてに、金を取られん様に」

「違ふがな、藝妓は承知で手を入れさしてゐるねん」

「ほんなら藝妓は知つてるのんか」

「そうや」

「それで安心を仕た」

「お前が心配をせいでもえゝ、あの藝妓にあのお客が附いたあるねん」

「藝妓にお客が附くか」

「そうや、皆藝妓にお客が附くもんや」

「お前所のお婆さんに狐が附いたな」

「そんな物と一緒に仕ないな」

「併しあないに仕てたら腹が減るやろ」

「そうやさかい板場が附いて居るねん、是から御馳走が出るねん」

「ア、持つて來た、大きなお碗や」

「お碗やない、あれは大平や」

「あれ一人に一つづゝか」